
俺とマフィアと時々天使

苦労肉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とマフィアと時々天使

【Nコード】

N8456Y

【作者名】

苦勞肉

【あらすじ】

魔法が当たり前に使われている小さな国で起きたマフィアの抗争。

自称天使の奇妙な髑髏の顔の男から、世界を救う事を託されマフィアとして奮闘する男の2週間

プロローグ

「単刀直入に言おう。今からお前には2週間以内に世界を救ってもらう」

オーバーサイズのチノパンに、これまたオーバーサイズのパーカーを着てフードを深く被った――顔が髑髏の男がそう言った。

「……………」

ちよつと待て状況を整理しよう。俺の名前は外道ギン《そとみちぎん》、それは覚えている。だが大きなテーブルを挟んで目の前にいる髑髏男には覚えが無い、というか此処は何処だ？ 見渡す限り白色の空間、髑髏男と俺とテーブル――その上に一枚の紙。

「単刀直入に言おう。今からお前には2週間以内に世界を救ってもらう」

ギンの思考を遮り、再度同じ言葉を言う髑髏男。

「それはさっき聞いたよ！ 一体どういう事だよ！ 世界を救う？ その前にここは何処？ お前の顔は何で髑髏？」

一気に捲し立てるギンに、ふうつ、と一息付き髑髏男が答える。

「単刀直入に言おう。今からお前には2週間以内に世界を救ってもらう」

「……………」

ちよつと待て。おかしい三回目だぞ。全くコミュニケーションが成り立たないぞ。たしかにフードを深く被っていて、お世辞にも外見からは社交的な雰囲気は感じられない。だけどさすがにおかしいだろ、ひよつとしてこいつは同じ言葉しか喋れないのか？ はいわかりました、というまで俺はこのままなのか？

「なんなんだよ一体…」

ギンは情けない声で、思わず呟いた。

「…わかったよ」

そう言つと髑髏男が頬を掻きながら心底だるそうに語り始めた。

「世界を救うつてのはそのままの意味だ。此処は何処だつて言われると、どう言えば良いのかわからんがまあ、俺の部屋みたいなものだ。顔が髑髏なのは俺が天使だから当たり前だろ。で、他には？」

ギンは口をあぐり開けたまま、この目の前にいる髑髏男の話を聞いた。そして、こいつが天使？こいつの部屋？なんで俺が世界を救う？そんな新たな疑問でいっぱいになりながらも思わず叫んだ。

「お前さっき無視したのかよ！」

だつてそうだろ。こいつは俺の最初の言葉を無視して、同じ事を三度も繰り返したわけだろ。そんなやつが天使？どっちかって言ったら悪魔だろ。

「まあまあそう怒るなつて。さっき無視したのは悪かったよ、すい

ませーん」

自称天使の髑髏男が申し訳なさそうな姿で、しかしそれとは全く逆の人を馬鹿にするような明るいトーンの声で謝る。

「…何か釈然としないがわかった許してやるよ」

ギンが不満気に答えると、じゃあ、という一言の後に髑髏男は親指を立てて言い放った。

「世界を救いましょうか」

ブログ&1t・2>・取引きと名前（前書き）

キャラ同士の会話を書くのが楽しすぎて全然話が進みません。

ブローグ&1t・2>・取引きと名前

「いやいやいや！」

まだ親指を立てたままの髑髏男の前で、ギンが手をブンブンと横に振りながら抗議する。

「そんな軽く言われても！それに第一……」

そこで言葉が詰まる。

おかしい。第一俺の生活はどうなる？と、言おうと思った。でも、今まで俺がどうやって暮らして来たのかが思い出せない。名前、外道ギン。年齢、22歳。嗜好品、煙草、銘柄はラッキーストック。でも今まで自分が何をして生きてきたか、誰と関わってきたかという部分が、記憶からすっぱり抜け落ちている。

「どういう事だよ……」

底知れぬ不安からか自分でもびっくりするくらい震えた声だった。

「あーもしかして今までの記憶が無いって気付いた？」

ギンの様子から何かを悟ったのか頬杖をつきながら髑髏男が言った。

「ああ、何も思い出せない……お前の仕業か？」

「俺の仕業じゃない、ってわけでも無いんだがそういう決まりなんだよ」

「決まり？」

「世界を救うための決まりだ」

さっきから話が全く進展しない。できればスルーしたかったが聞くしかないようだ。

「できれば聞きたく無かったんだが、さっきから言ってる世界を救うって何だ？具体的に教える」

そう言われると今までずっとふてぶてしかった髑髏男が、前のめりになりながら話し始めた。

「それはな——」

「なるほどわかった、今までのお前は何だったんと思うくらい具体的にだったな」

ギンが少し表情を崩しながら言うと、髑髏男はまた、グッと、親指を立てた。

髑髏男の話をまとめるところだ。

今から2週間後に世界は無くなる。その原因は小さな国で起きた。その国は王や政府という存在は無く、ファミリーと呼ばれるマフィアが存在し、それぞれのファミリーでそれぞれのテリトリーを守り、時には協力しながら長い間抗争とは無縁で過ごしてきた。だが、何が原因かわからないが抗争が起きた。その抗争が原因で世界は無くなってしまふ。2週間以内にその抗争を止めると世界は救われる、めでたしめでたし。だがここからが問題だ。

「俺は何を願ったんだ？」

「しつこいねえ、それは言えないって。じゃなきゃ意味無いだろ」

この目の前にいる胡散臭い自称天使の話によると、何でも俺は記憶を失う前にこいつと、ある取引きをしたらしい。その取引きの内容は、俺の願いを叶える代わりにこいつの願いを叶える、という物だ。そしてその取引きには他にいくつかルールがある。

俺の願いが叶うのは天使の願いを叶えた後。

俺が願いを言った瞬間取引きが始まり、さらに俺の今までの記憶は一時的に消える。

記憶は俺が天使の願いを叶えるか、その願いを却下して取引き不成立になった場合に帰ってくる。

「んー何度考えても俺に不利じゃないかこの取引き？」

「ただの人間が好きな願いを叶えられるんだ、死ななきゃ安いもんだろ」

「そういつもんか」

「そういつもんだ」

髑髏男は言い終えてすぐ、よっ、というテーブルの上にコーヒーが2つ出てきた。

「まあ飲めよ、煙草も吸うだろ？」

そういうとまたテーブルから煙草が2つ出てきた。

「ああ、ありがとよ」

そういうとギンはコーヒーを一口飲み、煙草に火を付けた。

「しかし便利な魔法だな、俺の願いはその魔法が使えるように、とか？」

少し笑い混じりにギンが言うと、髑髏の男はフツ、と鼻で笑った。表情の変化の無い髑髏の顔が少し笑ったように見えた。

ギンは煙草の煙を深く吸い、

「冗談はさておき、さっきの取引きの話の続きだが」

そこまで言うつと煙を吐き出し、髑髏男を真っ直ぐ見つめて言った。

「記憶を消す意味あるのか？自分の願いが何かわからないならお前の願いと釣り合いが取れてるかわからないし」

「何でもこの取引きを作った天使が決めたらい。そういった釣り合いとか損得抜き、の清い心の人間を見極めるためとかなんとか」

「清い心ねえ…ってやっぱりお前以外にも天使がいるのか？」

「いや、天使つてのは常に一人だ。新しい天使が現れると前にいた天使は消える」

「お前もいつ消えてもおかしくないのか」
「まあそうだな」

そう髑髏男は言った後続けざまに、

「さっきからお前お前言いすぎだ。それでも俺は立場は天使だしちゃんと名前はある」

意外とそういうとこ気にするんだな、と思いながらギンは答えた。

「悪いな。そういえばお互い名前を知らなかったな、俺は外道ギン」

そういつとギンはコーヒーを啜った。

「俺の名前はランランだ」

ギンは飲んでいたコーヒーを吹き出した

ブローグ & It・3 & gt・確信と悪魔

「天使の名前を笑うとは本当に失礼なやつだな」

そう言いながら自称天使の髑髏男——もといランランは、自身の魔法で出したタオルでコーヒーまみれになったテーブルを拭いている。

「いや悪い悪い、あまりにも外見とかけ離れていてな」

オーバーサイズのチノパンにパーカー、更に髑髏の顔と、こいつこそマフィアに見える外見しといて名前はランランって。似合わないにも程がある。

「まあたしかに銀髪で名前はギン、って男に比べられたらかけ離れた名前してると自分でも思うけどよ」

テーブルを拭き終わったランランが目の前銀髪の男に向かって言った。

ギンは、まあな、と言うと一息付き、真剣な目で

「で、そろそろ本題に移ろう。要するに俺は今から世界を救えばいいんだろ？」

と、言った後また煙草に火を付けた。

「お、意外だな。取引きを断ってさっさと記憶を戻す気だと思っただが」

「それはもちろん真っ先に考えた。でも俺は記憶が無くなる事を承

知して取引を開始したんだろ？」

「そうだ」

「じゃあランランの願いがどんなものでも、釣り合いの取れた事を願ったはずだ」

「取引開始前の自分はそこまで考えて取引したはずだ、と」

「ああ」

「やけに自分を買っているな。」

「まあな、だから俺は世界を救うつてのを受けようと思う」

「そうか、じゃあお前にもう一つ伝えなきゃいけない事がある」

そう言われたギンは少し驚いたような顔をした。

「なんだ、まだ他にあることに驚いたか？」

「まあそれもあるが、最初あんなだけ質問を無視したりだるそうにしていたのに、自分から言い出したもんだから」

「それはギンが自分の言つてた事と違ったからだ」

「俺が言つてた事？取引開始前の俺か？」

「そうだ、取引を開始する前にギンが、ごり押しすればきつと取引開始後のギンは承諾するってな」

それまで淡々と話していたギンが少し笑みを浮かべながら、

「なるほど、なおさら世界を救うつて事にやる気が出た」

と、言いつつ煙草を消した。

これはランランに感謝するところだろう。取引開始前の俺と今の俺。違うところはそれまでの記憶が有るか無いかで、考え方については変わっていないはずだ。それなら取引開始前の俺は、自分がランランの願いをごり押しされても無駄だとわかっていた、それでもそうランランに伝えた。

「ん？何だかよくわからないがそれは有り難い」

ランランは急に笑みを浮かべたギンに戸惑っている。

「まあな」

ギンが適当な返事をする。

無駄だとわかっていて、何の意味も無い事を伝えてくれ、とは取引
き開始前の俺は言わないだろう。って事は何か意味があるはずだ。
それは今の状況から考えたら今回の取引き、俺の願いの事だろう。
俺は取引き開始後の俺に無駄だとわかってごり押しした。つまりそ
のことが意味するのは、どうしても叶えたい願いだという事を取引
き開始後の俺に伝えるためだ。無駄だとわかっていることをするく
らい、必死になって取引きを開始したんだと。俺の考えすぎかもし
れない。でもそう思わずいられない。今までの記憶が無くて、俺
は俺だ。

「で、もう一つ伝えなきゃいけない事って？」

すっきりとした顔でギンはランランに聞いた。

「俺が天使つてのはまあ信じてくれてんだよな？」

「まあ半信半疑だけど一応な、どっちかって言ったら悪魔に見える
し」

「そうか、それで俺の伝えたい事つてのはその悪魔だ」

「やっぱり天使だけじゃなくて悪魔もいるのか」「ああ、ただいる
だけならいいんだが厄介な事になってな」

そう言うところランランは煙草に火を付け、悪魔について話し始めた――

「その悪魔の取引きつてのは、天使の取引きがとんでもなく良心的に感じるほどひでえな」

ランランの話が終わるとギンは率直な感想を言った。

何でもその悪魔にも願いを叶える取引きができるらしい。その取引きをまとめると、

人間と悪魔、お互いの願いを叶え合うというのは天使の取引きと一緒。

ここからが天使とは違う点。

まず順序。悪魔の取引きは人間の願いを叶えた後に、悪魔の願いをその人間が叶える。

そして取引きの成否。

取引きの成立は人間が願いを言った瞬間、そしてそれと同時に人間の願いは叶い、悪魔の願いを聞くことになる。そのため取引きの開始という状態が無く、記憶の一時的な消去も無くなるが、悪魔の願いがわからない状態で取引きが成立してしまう。

「そんな馬鹿な取引きをするやつがいるとはなあ」

「ああ、全くだ」

ギンとランラン、お互い2杯目となるコーヒーを啜った。

何でもその取引きを受けた人間がいるらしい。それだけなら馬鹿だなあ、で済むのだがそういう訳にはいかない理由がある。それは――

「悪魔の願いが世界を消せつてのはさすがに想像できなかったな」

ギンは呆れたような顔をして続けた。

「誰々を殺せ、とか自殺しろ、とかだと思っていたけどさすが悪魔だな」

「死ななきゃ安い、どころじゃ無いだろ？」

「ああ本当だな」

ランランはコーヒートをグツと飲み干すと、ギンを真っ直ぐ見つめた。本来眼球がある場所は髑髏の顔のため暗い空洞になっている。その不気味な目を向けて言った。

「つまり、ギンが世界を救うという俺の願いを叶える場合、悪魔と取引きをした人間と争うことになる——はっきり言おう、そいつはお前の事を殺すだろう」

ギンは少しビクツと体を強ばらせた。

「そいつは世界を消すために、マフィアの抗争を止めないように工作をする。そうなるとたしかに止めようとする俺を殺すのは手っ取り早いな」

「そういう事だ。まあギンがそいつがどんなやつかわからないように、そいつもギンが俺と取引きをした人間とはわからない」

「でも抗争が起きてる中、マフィアでも無い俺が抗争を止めようとしていたら」

「もちろん狙われるだろうな」

ギンとランラン、お互いに黙り少しの沈黙の後、先にギンが口を開

いた。

「まあいざとなったら俺がそいつをぶっ殺せばいいしな」

「天使の前で言うとは感心しないが、世界を救うためにはそれもありだ」

そう言うと、ランランがパチンツ、と指を鳴らした。そうするとテーブルの上に散乱していたカップや煙草の吸い殻は無くなり、最初に見た一枚の紙だけが残った。ランランはその紙を手に取りギンに向けて言う。

「俺から伝えることはほぼ終わりだ。後は取引き成立後に少しあるだけだ」

「なんだそれ、ここまで来て歯切れが悪いな。その紙が関係してるのか？」

「まあそうだが些細なことだ。それにお前にとって得なことだから気にするな」

「あまり釈然としないが、わかったよ」
「それで」

オホンツ、と人間のような咳払いをした後、ランランは続けた。

「世界を救うという俺の願いを受けるか？」

ギンはニヤリと笑いはっきりとした声で言った。

「当たり前だ」

1日目&1t:1>:マフィアと魔法

「さてと、まずは腹ごしらえだな」

曇りの空が広がる国、マシーンヘッド。この国で起こるマフィアの抗争、それを止めるために今日から2週間を過ごす男、ギンが歩いていた。

「しかし、こんだけ建物があるのに、飯屋が見当たらねえな」

そうギンは独り言を呟くと一旦立ち止まり、辺りを見渡す。一面高低様々なビル等の建物が立ち並んでいるが、ほとんど看板も無く一体何の建物かはわからない。

ちらほらと人は見えるため住宅地帯なのか？などと考えながらギンはまた歩き始めた。

世界を救う——荒唐無稽だが俺は、それを2週間以内に成し遂げなければならぬ。そのためには原因となる、マフィアの抗争を止めなきゃいけない。

そうなるとまずは情報集めだ、何が原因か、いくつかのマフィアがあるのか、そんな基本的な事も知らずに抗争を止めれるはずもない。そんな事を考えながら歩いていたギンは、いつの間にか看板が多く立ち並んだ場所に来ていた。

「カフェ、クビキリ？なんて物騒な名前してんだ」

ギンは一番近くにあったカフェの看板が目に入った。カフェ、クビキリとだけ書いてある看板の下には至って普通の喫茶店がある。名前は奇抜だが普通のカフェだろう、それに腹のほうも限界だ。カ

フェとはいえ何か食い物くらいあるだろう。
そう考え、ギンはカフェ、クビキリのドアを開けた。

「全くジャムと組むなんてどうかしてる…」

何か話し中のこちらに背を向けた男と、黒髪の少女がテーブルを挟んで向かい合っていた。ギンが店に入ると男は話を止め、チラッとこちらを見た。

「君、見ない顔だねえ。ま、どうでもいいけどさ」

そう言うと、男はおもむろに胸元から拳銃を取り出しギンの頭に向けて撃ち放った。

男はコーヒーを一口飲み、何事も無かったかのように目の前の少女に話し始めた。

「ったく、この時間のクビキリに来るなんて何考えてんだか」

「見ない顔って、鴉カラスが、自分で、言ってた」

「まあそうだけども、話聞かれたらまずいでしょ」

「殺すこと、なかった、かも」

「そうだぞ危ねーだろアホ！」

そう叫んだ声が男の背後から聞こえた。男は驚いた顔で振り返ると、そこには今さっき自分が頭を打ち抜いたはずの銀髪の男——ギンが立っていた。

「じゃあ取引き成立だ」

どこまでも続くように見える白い部屋、そこでテーブルを挟んだ人間と天使——ギンとランランの取引きは成立した。

「随分あっさりしてんだな。で、さっき言った些細な事って？」
「まあさっきも言った通り、この紙の事なんだけどな」

ランランの手には一枚の紙が持たれている。その紙をおもむろにぐしゃぐしゃに丸め始めた。

「何やってんだ？」

「これでよし、さあ食べ」

「食えってこのゴミをか!？」

「ゴミじゃない! 契約書だ、さっさと食べ」

事態がうまく飲み込めないギンだが、ぐしゃぐしゃに丸くなったゴミ——もとい契約書をじっと見つめ、それを飲み込んだ。

「今までの記憶は無いが、紙クズを食ったのは多分初めてだな。で? 食ったけど?」

「これで取引きは完全に成立した。それとも一つ、俺からのプレゼントだ」

「プレゼント?」

「ああ、飲み込んだ契約書はギンの魔法の源となる」

そうランランは偉そうに言った。

魔法、それは世界で常識的に使われている。魔法を使うには源という対価や代償が必要となる。源は基本的には自分の一番大切にして

る物。例えば音楽が好きならば聴力が源となり、魔法を使うならば一生聴力の無い生活を送らなければならない。

「つまり俺はノーリスクで魔法が使えるわけだ」

「そういうことだ。まあ残念だが使える魔法は決まっているがな」

「まあほとんどタダで魔法が使えるんだ、感謝するよ。で、魔法は？」

「自動防御、って言ったところだ。お前に対する魔法を自動で打ち消す。」

「なるほど、それはかなり有り難い魔法だ。改めて感謝するよ」

そう言われたランランは、少し照れたように親指を立てた――

「いやーびっくりしたよ！魔法が効かないなら最初から言ってくれないと」

男は斜め前に座るギンに向かって言った。

「言う暇も無くお前が撃ってきたんだろ！」

少し苛立ちながらギンは言い返す。

いきなり拳銃をぶっ放してきた、いかれた男の名前は鴉からす、と言うらしい。金髪でボサボサの頭に髭、服装はスーツと、なんとも胡散臭い外見してやがる。しかし、さっきいきなり撃たれた時は死ぬかと思った。鴉は拳銃に、魔法の弾を使っているらしい。何でも弾数を気にせず、無限に撃てるからだと言明してきた。そのために源を払

っているのだから、かなりの変人だ。まあ今回は変人だったからこそ、助かったのだが。

煙草を吸いながら鴉が平謝りする。

「悪い悪い、申し訳ない」

「まあ俺にも非があつたわけだし、お互い様で」

「お！心が広い男だねえ、ギン君は」

「調子に、乗っちゃ、ダメ」

ギンの隣にいる独特の会話速度の少女が鴉に横やりを入れた。黒色の長髪、小柄で灰色を基調としたワンピースを着た、この少女はメムという名前らしい。

「メムちゃんは相変わらず手厳しいねえ」

「初めて、バザーに、来たなら、わからなくて、当たり前」

「まあでも、ギン君がどこかのファミリーじゃなくて良かったよ。スーツを着てるもんだから、てっきり」

「検索に、かからなかった、マフィアじゃない」

鴉とメムが話している横で、ギンは考えていた。

先程、鴉に撃たれた時にその場をやり過ごすために俺に魔法は効かない、と説明した。あまり無闇に自分の魔法を知られたく無かったのだが、こいつらとの話でかなりの収穫があつたから、よしとしよう。ここいら一带はバザーと呼ばれる地域で、たった2人しかマフィアはいない。その2人のマフィアは昼間のカフェ、クビキリに根城を置いている。そのためバザーでは、昼間のクビキリに行くのはタブーとされている（そもそもクビキリは夜間しか営業してないようだ）。つまり何が収穫かと言うと――

「鴉はともかく、メムもマフィアとはな」

「マフィアって言うっても、どのファミリーにも所属して無いけどねえ」

「ギンも、マフィアに、見える」

「たしかにスーツ着てるもんねえ」

「何となく着てんだよ」

鴉とメム、両方に視線を向けられたギンは適当に答える。

あの白い部屋にいた時からスーツは着ていたままだ。特に外見に気にしていなかったが、たしかに少し変だったかもしれない。しかしこの2人がマフィアなら抗争について多くの情報を聞きだせるはずだ。が、その前に、

「何か食い物は無いのか？もう腹が限界だ」

1日目&1t・2>・新婚気分と王政復興

「ダムドも禅も、未だに動きは無いようです」

ここはとあるビルの一室。そこには白いスーツを着た初老の男が偉そうにソファに座っている。その男の目の前には、立派なテーブルがある。それを挟み、赤みのかかった長髪に、黒いスーツを着た女性がソファに寄りかからずに背筋を伸ばし、座っている。お互い、背後に男が一人ずつ立っている。

「あたし達が禅のところの構成員を殺ってから丸一日、何も動きは無い、か」

女はそう言うつと煙草を一本取り出す。背後の男がすぐにそれに火を付けると口を開いた。

「動きが無いならさつさとダムドも禅も殺っちゃいましょうよ、ジヤム姉さん？」

ニヤケながら、自分も煙草を取り出したその男は白髪短髪、よれよれのスーツといかにも不健康そうな外見をしている。その男に背を向けたままで、女——ジヤムは冷たく言い放った。

「いつからお前の姉さんになった、シムラ。ご機嫌取りだとしても気持ち悪い」

そう言われてもニヤケた顔を崩さない男——シムラは、へいへいと適当に相槌を打つと煙草の煙を吸い込み、そっぽを向いた。その光景を見ながら苦笑している初老の男は、オホン、と咳払いをした後にジヤムに向けて、

「いくら幹部とはいえ、ジャムファミリーは自由なこった」

と、言うとき葉巻を取り出す。すかさず背後にいる、綺麗に白いスーツを着こなしたメガネの男が、火を無言で付ける。

「ポンザさんのところは堅すぎるとも思うがな、さすがはロイヤルファミリーですな」

ロイヤル、という部分を強調してニヤケながらシムラがまた会話に入ってきた。初老の男——ポンザはシムラを睨むと、シムラに向けて言い放つ。

「ロイヤルを名乗って何か問題があるのか？」

「いやいや何も。そうカッコしないてくださいよ。」

「シムラ、少し黙っている」

ジャムが、チラっ、とシムラを見て睨むと、シムラはニヤケながらすいません、と一言呟き黙る。それを見たジャムは煙草の火を消すと、真っ直ぐポンザを見て、

「うちの者が無礼をすまない。せつかく協力関係になったというのに」

と言い謝罪をした。ポンザは少し笑みを浮かべ、

「まあそうかしこまるな。俺も少しカッコしすぎた。せつかくの協力関係だ」

協力関係、という部分を強調し、シムラを、チラっ、と見ながら言った。シムラはどこ吹く風で煙草を吹かしている。そのシムラをポ

ンザの背後にいるメガネの男はじつと見つめる。少し間が空いた後、ジャムが口を開く。

「少し話が逸れたが本題に入らせてもらいたい」

「いやーこの時間だから大した物は出せなくてごめんね！」

元気で大きな声がカフェ、クビキリに響く。今、このクビキリでは鴉、メモ、ギンが食事をしている。ギンはトーストを口に頬張りながら、カウンターにいる女性に向かって、

「いやいや今の俺にとってはご馳走ですよ。わざわざ睡眠中にすいません、ナミダさん」

と、言う与会釈した。そう言われた、栗色でパーマがかかった髪の若い女性——ナミダは手をブンブン振りながらギンに言う。

「いやいやお腹を空かしたお客さんが、そんな遠慮しちゃダメだよ！」

「いえ、営業時間でも無いの来たんですから」

「もー！だから遠慮しちゃダメだって！それと、これでもまだ二十歳なんだから敬語もさん付けも禁止！」

「そうで… そうなんだ。大人びていたからてつきり年上だと」

「もー！褒めないでよ。ってことはギン君は今21？22？」

「22だよ。あ、トーストまだある？」

「はいはい！」

終始テンションの高いナミダと、会話中でもトーストを頬張り続け

たギンを余所に、鴉はMEMに小声で問いかけた。

「老けてるじゃなくて、素直に大人びてると受け止めるってどうなのかねえ？」

「良く言えば、素直。悪く言えば、単純」

「後者だよねえ」

「うん」

「いやーファミリーに入ろうとしたその日に、抗争が始まっちゃったなんてギン君も不幸だね」

追加のトーストを持ってきたナミダがそうギンに話しかける。どうも、と一礼した後、ギンはトーストに手を伸ばしながら応える。

「まあ残念ですけど入って次の日に、右も左も分からない内に抗争が始まるよりは、良かったですけどね」

そう言うときギンは、トーストを口に詰め込み始めた。

今、俺はマフィアになるためにこの国を訪ねたが、生憎その日の内に抗争が始まってしまった。抗争中にもかかわらず、そんな怪しい男を迎えてくれるファミリーもあるはず無く、路頭に迷っていた。という嘘をこのクビキリにいる三人に説明した。いきなり、いやー、天使と取引きして記憶無くなっちゃったんですよ、なんて正直に言ったら、完全に頭のおかしい人に思われるだろう。なので、なるべくこの国の事を知らなくても自然に見える嘘をついた。あまり嘘は好きじゃないがしょうがない、世界を救うためだ。

ギンが持って来られたトーストを食べ終ると、ナミダはニコニコとした表情で訪ねる。

「まだ食べる？」

「いや、腹一杯だ。ありがとう」

ギンはそう断ると煙草に火を付ける。ナミダは食器を片付け、ギンにウインクしてカウンターの方向に戻っていった。

「どうだいギン君？世話焼き妻との新婚気分は」

「亭主関白」

鴉がニヤニヤとしながら茶化し、メムもそれに乗ってきた。

「まあ順調だよ」

「お、ノリいいねえ」

「まんざらでも、ない？」

ギンは笑うと、少し落ち着いた表情になった。それを見たメムは独特のテンポで喋りかける。

「もう、聞きたいこと、無い？」

「ああ、大方この国の事は知れた。ありがとう」

「どう、いたしまして」

「僕にもお礼は？」

「鴉はいきなり発砲してきたんだから、これで帳消しだ。と、言いたいところだが、ありがとうよ」

「はいよ」

この2人からは色々な情報を教えてもらった。まず、この国のマフイア達。ダムドファミリー、ジャムファミリー、禅ファミリー、ロイヤルファミリー、有力なマフィアはこの4つ、4大ファミリーと呼ばれているらしい。そして今回の抗争の原因は、ロイヤルファミ

リーが禅ファミリーの構成員を殺害、そしてジャムファミリーとの同盟宣言。つまり事実上の宣戦布告。これに対してダムド、禅の両ファミリーが非難と共に強い反発を表明し、抗争へ。それが実は俺が天使と取引きをする一日前、つまりつい昨日の出来事だ。何故、今まで平穏だった状況をジャム、ロイヤルの両ファミリーはぶち壊したのか？その理由は――

「王政復興って随分大義名分な抗争だな」

ギンは、トントン、と煙草の灰を落しながら呟く。鴉はあくびをした後、ぶっきらぼうに返す。

「中身は空っぽだけどねえ」

「一応、ロイヤルファミリーってのの起源は元を辿れば、昔のこの国の王だったんだよね？」

「ああさっき説明した通りそうだよ。昔って言っても大昔、300年以上前だねえ」

「それを今さらになって、俺は昔の国王の家系だ。王政復興だ、と」
「そう。たしかにロイヤルファミリーの起源は間違いない。でも今さらすぎるし、やり方もさつだしねえ」

「まずは見せしめに禅ファミリーの構成員を殺したあげく、王なんて全く関係無いジャムファミリーと手を組んだ。たしかにがさつだ」
「最初からすんなり受け入れられる気なんて無い、抗争ごもつともって感じだねえ」

「たしかにそうだな」

ここまでの話を聞く限り、原因は間違いなくジャムとロイヤルファミリーだ。となると世界が消えるきっかけは、この両ファミリーにあるのか？未だに、どうして抗争を止めると世界を救う事になるのか、掴めない。

ギンが少し思い詰めた表情で考えていると、ガチャ、とドアが開いた。

「イソザキさんおかえりー！」

ナミダの元気な声が聞こえ、後ろを振り向くと、灰色の毛並みの犬が見えた。

犬に向かっておかえりとは可愛らしい人だな、ドアを自分で開けたみたいだが賢い犬だな、などとギンが呑気に考えていると、犬と目が合った。

「誰だ？お前」

犬が、低い声でギンに向かって喋りかけた。

1日目&1t・3>・完璧と人間性

我が主、楠木禅くすのぎぜんは完璧である。

今日も曇り空の広がるこの国、マシーンヘッド。気温、湿度共に、我が主にとって最高のコンディションであろう。時刻は朝の7時5分。

「おう、早いな。カメラもケーキも用意してあるな」

我がファミリーの起床時間は8時。それにも関わらず、常に5分前行動という完璧な信念を持って、我が主が食堂へ参られた。

「もちろんですとも。今日の禅様はより一段と完璧な佇まいであります」

「まあ娘の誕生日だからな。写真も取ることだしな」

我が主、楠木禅様の今日の服装は、茶色のストライプが入ったスーツである。パーマのかかった髪型と共に、完璧な美的センスである。今日は楠木禅様の御令嬢である雫しずく様が、5歳となる誕生日である。そのような偉大なる日に、私のようなうだつのあがない男が、記念撮影を任されたのだ。

「サイトウ、他のモンはどうした？」

「記念撮影を終えるまで、各々自室で待機するようです。禅様と雫様の、束の間の親子水いらずを邪魔しては、と思ひまして」

「気を利かしてもらって悪いな」

「いえいえ滅相も無いです。先日の件がありましたので、当分こういった時間は取れないでしょうから」

「ああ、そうだな。でも、ファミリーが殺られたんだ、俺だけ呑気に祝い事なんかしてて…」

「いえ、それは昨日ファミリー全員が納得したことです。理由は先程申し上げた通り、どうか気にせずにお楽しみください」

「迷惑をかけるな」

「迷惑だなんて。我々ファミリーのボスは禅様なのですから」

このような目出度い日にも浮かれず、ファミリー全体の事を考える我が主の姿勢に感服せざるを得ない。正にこの姿こそが、マフィアのボスというものである。

「あれーみんなはー？」

「おはようございます。そしてお誕生日おめでとうございます零様」

我が主の御令嬢、零様が参られた。時刻は8時7分。5分以上の遅刻は我がファミリーでは罰則だ。いくら禅様の御令嬢とはいえ――

「しいずくうううー！誕生日おめでとおおー！」

我が主が満面の笑みで零様にお祝いの言葉をかける。非常に微笑ましい光景だ。我が主、禅様は些細な遅刻など気にしない、寛容かつ完璧な心を持つておられるのだ。

「お父さん、うるさい」

「んなつー！うるさいだなんて、パパ悲しいなー泣いちゃうなー」

「サイトー、みんなはー？」

「記念撮影が終わるまで待つてもらっております」

「無視しないでよおーしいずくうー。ほら！ケーキあるぞ！」

「ケーキー！」

「パパが零の為に用意したんだぞお」

「ありがとお父さん！」あのケーキは私が昨日用意した物と同じに見えるが、きつと禅様も似たケーキを用意していたのであろう。

「それではケーキを食べる前に、記念撮影をさせて頂きます」

「えー早くケーキー」

「雫、もっとパパの方に来なさい！ほら、だっこしてあげてもいいぞお」

ケーキを真ん中に禅様、雫様が並んで座られる。心なしか雫様が避けぎみに見えるが、きつと照れているのだらう。無理も無い、私も禅様のような完璧な父親を持っていたら萎縮して目も合わせられないだろう。

「それではよろしいですか？」

「おっけー」

「雫、本当にだっこしなくていいのか？雫？」

「お父さんしつこい！」

雫様の誕生日に記念撮影をするというこの伝統的行為に、私サイトウが毎年責務を任せられている事に感謝せざるを得ない。

「それでは取りますよー？。25×19÷33はー？」

「にー！」

「14.39」

我が主は、完璧である。

「つまり、魔法の源は人間性、と言ったところか？」

「そうだ。人間という種族は偉大だと教わって来たんだ。当時魔法を得ようとした時の俺は、よっぽど人間である事が誇らしかったんだろう」

カフェ、クビキリでギンは言葉を喋る犬——イソザキと会話をしている。

「だったんだろう、って随分投げやりだな」

「俺がまだガキのころだから、もう40年程前の事だ。あまり覚えてないんだよ」

「40年……ってかなり年上じゃないですか。今までかなり失礼な口の聞き方してました、すいません」

「よせよせ、敬語を使われるのは好きじゃない」

このイソザキという犬は元は人間だったらしい。魔法を使うために源として、一番大切に思ってた「人間であること」を失ったのだという。その結果、犬の姿になってしまったのだと。しかしそう説明されても、犬と目を合わせて会話するとは奇妙な感覚だ。

「僕も一応年上なんだけどねえ」

「それでは敬語を使います。鴉さん」
「気持ち悪いからやめてくれ」

ギンにちよつかいを入れてきた鴉は、フツ、と鼻で笑った。ふざけていても、あまり嫌味を感じないのがこの男の良いところだろう、とギンが考えていると、

「そろそろ例の件に入りたいのだが」

と、イソザキは鴉に向けて言った。鴉はチラッと時計を見る。それ

につられてギンも見ると、時刻は午後の6時を回ったところだった。

「というわけだ、ギン君」

「どういう訳だ？」

「僕達はこれから、ギン君のような一般人には聞かれない話をするんでね」

「帰れ、と」

「悪いけど、簡単に言つとそういう事だ」

「嫌だと言つたら？」

「ギン君がこの店に入つて来た時にした事に、一つアレンジを加える」

「今度は魔法じゃなく鉛の弾だ、ってか」

「物分かりがいいねえ。そういうところも含めて、僕は割と君の事を気に入っているんだ」

「そうか」

「だからおとなしく帰つて…」

「断る！」

ギンが強く言い放った。まさか断られるとは思わなかった、と言わんばかりに鴉は口を、ポカーン、と開けたまま言葉を失っている。

「何か理由でもあるのか？」

イソザキがギンの目をじつと見つめ、問いかけた。ギンは視線を逸らさずに応える。

「俺はマフィアになりてこの国に来たんだ」

「それとこれとで何の関係がある？」

「大ありだ。あんた達、マフィアなんだろ？」

「ああ、そつだ」

「そのマフィアのアンタ達が、俺には言えない話をするんだ」

「なんだ？俺達の話聞いて他のマフィアにでも売りに行くのか？」

「そんな事をしたって抗争中の今、どこも取り合ってくれないだろう」

「そうだな。それに俺達のような2人と一匹しかいない、小さなマフィアなんて誰も気にとめないだろうさ」

イソザキは少し自嘲ぎみに話した。自分を人、ではなく匹、と数えた事に何か思う事があるのだろう。そう考えるギンに対して、今まで黙っていたメムが口を開く。

「私、わかった」

「何がわかったんだい？」

鴉は、急に口を開いたメムを不思議に思ったのか、食い入るように訪ねた。するとメムはギンをじっと見つめる。黒く綺麗な長髪に、人形のように整った顔。それでいて感情を全く出さない少女に見つめられ、ギンはドキツと心臓が鼓動を打つのを感じた。

「ギン、私達の、仲間に、なりたい」

そう、少女は呟いた。

1日目&1t:4>:保留とトイレ

「普段ここで寝泊まりしてるのか？」

「うん、私の、部屋」

カフェ、クビキリの二階にある6畳程の一室。部屋に掛けてある時計の短針は、9の数字を少し過ぎたところだ。カフェ、クビキリは営業を始めたらしく、下の階からは人の話し声がボソボソと聞こえる。そんな部屋で、ギンは1つしかない椅子に腰掛け、少女と向かい合っている。目の前の少女――メムはベッドに腰掛け、無表情なままギンをじっと見つめ、話している。

「鴉とイソザキは、他の場所で住んでいるのか？」

「イソザキは、廊下とか、一階で、寝てる。鴉は、ふらふら、してる」

「ふらふら、か」

住んでいる場所を知らないとは、案外ドライな関係なんだな、などとギンは考えていると、トントン、とドアをノックする音が聞こえた。ギンとメムが反応する間も無く、ドアが開いた。

「差し入れ持ってきたよー！」

ナミダが元気よく部屋に入ってきた。綺麗に持たれているトレーの上には、コーヒーが2つと、サンドイッチ、それと灰皿が置いてある。

「おお！ありがとう」

「ナミダ、ありがとう」

メムが無表情で親指を立てると、ナミダも笑顔で親指を立てる。ギンはランランを思い出し、少し笑いながら呟く。

「流行ってんのかな」

「んー？ギン君何か言ったー？」

「いや、なんでもない」

ナミダは少し不思議そうな顔をした後、すぐに笑顔に戻りギンに灰皿を渡す。

「はい、これ！」

「おお、ありがとう。丁度灰皿が無くて、禁煙を決意しかけていたところだったよ」

「そう思ってたね。メムちゃんは煙草吸わないからね」

「私、未成年。ナミダは、気配り、上手」

「もーメムちゃん褒めないでよ、照れるじゃない！」

ナミダは栗色の髪を揺らしながら、笑顔でメムの頭を撫で始めた。年齢的に、姉妹でじゃれているようにも見える。

「仕事の方はいいのか？」

ギンは持ってこられたコーヒーを一口飲み、煙草に火を付けるとナミダに向かって尋ねる。

「あ、そうだった！」

ナミダはそう言うともめの頭から手を離し、ドアへと向かう。ドアノブに手をかけたところで、ハッ、という顔をした後に振り返る。そしてギンに向かって

「んー、あたしにはよくわかんないけどさ」

と、言うとき少し黙る。その後すぐにいつもの笑顔になると、

「ギン君がマフィアになったら、嬉しいな」

と、言い駆け足で部屋から出て行った。

「仲間になりたい？ギン君があ？」

カフェ、クビキリ。時刻は6時を少し過ぎ、外は大分暗くなっている。

「ちょっと待てメム！なんだそれ？」

ギンは少し焦りながらメムに詰め寄ると、メムは相変わらずの無表情で

「あたり？」

と、言うときコーヒーに口を付けた。

今さっきこの目の前のミステリアスな少女に、俺が鴉達の仲間になりたがってる、と言われた。ただの勘違い、と言い返したいところだが案外凶星なので困っている。俺自身もマフィアになるというのは、この国に来てからすぐに考えていたことだった。マフィアの抗争を止めるんだ、じゃあそのマフィアになるのが手っ取り早い。

「…まあ当たり前だが、人に言われるのは何かこっぴどくしかないな」

ギンはそう言うのと頼杖をつき、視線を下に移した。

まさか、今からこいつらに仲間に入れてくれ、と言おうとしている時に先にメムに言われるなんて。ただでさえ気恥ずかしさがあるというのに、ギン君も仲間に入りたいんですねー？なんて言われたらより一層恥ずかしい。

「なんで僕達の仲間になりたいんだい？」

鴉が真剣な表情でギンに問いかける。

「マフィアになるために、この国に来たから。じゃ、ダメか？」

「それだけか？」

イソザキがギンの目をじっと見つめて、話に割って入った。ギンはその視線にバツの悪さを感じながらも、目線を逸らさずに返す。

「わかった、正直に言うよ。その代わり俺の質問に1つだけ答えてくれないか？」

「質問によるな」

「鴉達が今から話す事は、マフィアの抗争に関する事か？」

「当たり前だねえ」

イソザキでは無く鴉が即答した。イソザキが慌てた様子で鴉に強く言う。

「おい！鴉！そんな軽く言うて…」

「いいじゃない。ギン君は物分かりがいいんだ」

「だからと言ってなあ」

「僕は、僕達の事を第一に考えて発言してるつもりだよ」

そう言つと、鴉はじつとイソザキの目を見つめる。イソザキはそれを見ると、何か納得した表情になると、

「嘘は、ついていないようだな」

と言い、目を逸らした。鴉はニヤリと笑つと、ギンの方を向く。

「じゃあギン君、理由を話してくれないかねえ？」

「笑うなよ？」

「笑いはしないさ」

「そうか」

そう言いギンは、オホン、と咳払いして続ける。

「抗争を止めたいんだよ、俺は」

そう、真剣な表情で言つたギンに、鴉、メモ、イソザキの視線が集まつた。鴉はボサボサの頭を掻きながら、ギンに問い掛ける。

「抗争を止める？僕達の仲間になつてどうやって止めるんだい？」

「協力してもらつ、とかじゃ無くていい。ただきつかけが欲しい」

「僕達を踏み台にして、反抗争派とでもコネクションを作りたい。と言つたところかい？」

「言い方は悪いがそういうことになる」

鴉が煙草に火を付け、少し遠くを見るような顔する。クビキリ内に沈黙が広がつた。

最後まで、正直にランランとの取り引きの事を言おうかと思つたが、踏みとどまつた。だが、鴉達の仲間になる事を拒否された場合、ま

ずい事になるのではないか。少し聞こえの悪い理由になってしまったが、しょうがない。

そうギンは考えながら、鴉達の返答をじっと待っている。メモとイソザキは、鴉に任せる、とでも言いたげな表情で鴉をチラチラと見ている。静かなクビキリ内、開店準備中らしいナミダが、倉庫でドタバタしている音が微かに聞こえるだけだ。鴉が火を付けた煙草は灰皿の中で、綺麗な一本の灰になっている。鴉がそれに気づき、苦笑した後、やっと口を開いた。

「少しずるい答えになってしまっけど、ちょっと保留ってことにしてもらえないかねえ？」

「保留？」

「ちよつと用事の時間でねえ」

鴉はとそう言うと、イソザキを見る。イソザキは何か思い出したかのように時計を見ると、口を開く。

「たしかにそうだな。話は行きながら説明する」

「ああ大丈夫」

イソザキがのそのそとドアまで歩く。それに続いて鴉が席を立った。

「おいちよつと待て！」

返答を焦らされたギンは少し声を荒げる。鴉は、チラツ、とギンを見ると

「もちろん何日も待て、とは言わないよ。明日の朝には帰ってくるから、それまでメモちゃんと留守番でもしといてね」

と、言っとギンの返事を待たずに、鴉とイソザキはクビキリを出て行った。

「留守番って言ってもなあ」

ギンは椅子に腰掛け特に何を見ているとわけでも無く、ポツリと呟いた。メムは何かをギュツと握り締め、ギンを見つめている。ギンは少し思い詰めた表情をした後、メムに問い掛ける。

「すまん、トイレはどこだ？」

ギンはメムの部屋を出て歩いている。

別にトイレに行きたいわけでは無かったが、何となく1人になりたかった。普段使われていない客用のトイレを使うといい、とメムに言われたが… あった、ここか。

「ふー。鴉次第だが、わりかし順調だな」

ギンは、ドアのすぐ近くにある姿見の前で呟く。少し無精髭が生えてきたな、などとギンは考えていると、トイレのドアが開いた。

「よう。調子はどうだ？」

ギンにとって聞き慣れた声が聞こえた。姿見には2人の男が移っている。1人は銀髪に180センチ弱程の背丈、そして黒色のスーツを着た男。そしてもう1人、前に映る男を頭1つ超える背丈、オーバーサイズパーカーにチノパン。そして髑髏の顔の——天使、

ランランが立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8456y/>

俺とマフィアと時々天使

2011年11月30日00時57分発行